

令和2年度 教育委員会の点検・評価報告書案に対するご意見等

A委員

【重点的に取り組んでほしい分野】

審議会の場で多くを語らせていただきましたので、ここで改めて申し上げることはありませんが、コロナ以前のことでしたので、それ以降のことについて一言だけ。

コロナによって、休業時間が本当に長く続き、消化しなければならない学習の時間がとれないことの焦りは、全ての教育機関にあると思います。受検勉強にあっては大きな差となって表れてしまうでしょう。

しかし、自由な時間、しかもひとり学習という中で、独自の探求、学びをしている子ども達もたくさんいるだろうと思います。そういう子ども達にスポットをあてて、広く紹介してあげることでむだにゲームなどで時間をつぶしてしまった子ども達に反省を促し、また独自の学習を評価してあげることで自信につなげてもらいたいと思います。

全てがマイナスではなく、コロナだったからこそ生まれたものを発見する取組をお願いします。

【地域ぐるみでの教育】

地域から子どもの声が聞かれなくなっています。少子化の波は学校の現場だけでなく町内会など地域の活動の機会を減少させてしまっています。そこで、こういう提案をさせていただきます。「もらい湯体験」です。以前、松江市朝日公民館の青少年育成事業で夏休みの公民館お泊まり体験を実施したことがあります。この時は夕食を終えてから参加した子ども達（小学4～6年生）15名を公民館から歩いて行ける地域の方々のご家庭に風呂に入らせてもらいに訪問するという体験をしました。これが迎えた地域の皆さんも大喜びで、参加した子ども達も自宅以外の家に行き、あいさつをして入浴し、お礼を言って帰ってくるという、初めての社会体験となりました。

こういった活動は公民館事業としてですが、学校、地域で取り組むと効果大です。

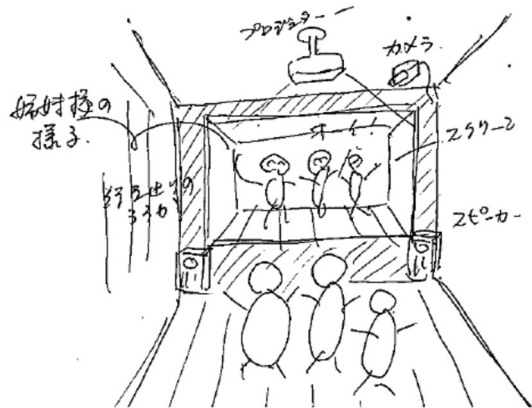
【教育におけるICT】

ICTの活用によって、先生対数十人の生徒さんという教室に於ける構図をそのまま学校と家庭に置き換える試みが続けられています。しかし、これは授業を準備する先生側に今までの何倍もの負担を生じさせ、個々の生徒の理解の把握のできないまま時間が過ぎるという、子ども達にとっても不幸なこととなる場合が多いと思います。

学校にしかないもの、それは授業と授業の間の休み時間での友人達との交流であり、先生との個人面談です。これをリモート化できるとICTの効果としては大きな成果があります。すなわち、①課題を与えた自習時間、②休憩時間、③理解度をチェックする個別面談 この3点をセットにカリキュラムを組みます。大切なのは②休憩時間の演出です。10分間という時間は子ども達にとってはとても大切に、出来るだけ先生は傍観の立場で子ども達の交流を見守られたらと思います。子ども達は自習の問題について話し合ったり、テレビの話をしたり自由です。そして休憩時間が終わり、次の授業に入ります。このメリハリがリモートでの授業の効率をUPさせます。今までの既成概念でリモート授業は・・・というのは離れて、より効果的なICT利用にチャレンジしてみてください。

【その他】

これは、今から20年も前に企業と相談しながら検討していた「どこでもドア チャレンジ」です。学校の廊下の行き止まりの壁にスクリーンとカメラ、プロジェクターを置いて交流する姉妹校の同じように行き止まりの壁にスクリーンカメラ等を置きます。すると、行き止まりの壁がとなりの学校に続く長い廊下になります。そこで休み時間に子ども達が勝手に交流する。休み時間が終わればタイマーによって交信が止まります。こんなシステムを夢見ていました。今なら簡単に可能！ 大切なのは先生の介在しないシステムです。



B委員

【重点的に取り組んでほしい分野】

令和2年4月は、小学校での新教育課程とともに、報告書P6①「しまね教育魅力化ビジョン」のスタート時期でしたが、コロナ禍により進捗が難しくなった点もあったと思います。ただ、まさにコロナ禍により課題が顕在化し、ビジョンで書かれていることがより必要になっており、今後着実に進めていただきたいと考えます。

特に、しまね教育魅力化ビジョン冊子P5掲載の図2について、「生きる力」を育成していくことが、個人の Well-being さらに、島根、日本、さらに世界の Better-being につなげていくためには、今回のコロナ禍によって、単純に知識・技能を蓄積していくだけではなにも解決しないことが明らかになった状況で、知識・技能を様々な体験の中で具体的に活用することで、新たな知識・技能を再構成していき、その中で、楽しさや好奇心が生まれ、より探究を進めていくことが主体的な学習者を育成していく各要素がスパイラルに循環していく学びを具体化していくことが重要と考えます。

この学びを具体化する中で、しまね教育魅力化ビジョン冊子P7「5『教育の魅力化』を進めるために」に書かれているように、地域の文化やそこに住む人々はすべて学びの素材になりうること、逆にいうと、子どもたちの学びの素材になりうるために、そこに住む大人が子どもの学びに質するだけの地域をつくっているのか、課題解決に向けて考え、行動しているのかが問われることとなります。そういった意味で、大人の姿勢が重要になると考えますし、だからこそ地域協働体制が必要になるものと考えます。

また、しまね教育魅力化ビジョン冊子P8〈教育の魅力化による次世代を担う人づくり〉に関連し、地域協働体制による子どもたちの学びの支援の質が、島根で学んだ子どもたちが大人になり、どこにいたとしても島根に愛着や誇りを持ち続けることにつながりますし、さらに、次世代の子どもたちの学びに貢献したいとの意欲につながるものと考えます。

また、報告書P26～P28「Ⅱ(1)インクルーシブ教育システムの推進」について、これからの社会を生きる子どもたちは、これまで以上に「多様性」の中で生きていくこととなります。特別支援へのサポートは当然ですが、子ども一人ひとりが個性をもち多様であることを考えると、誰もが学びを享受することができるアクセシブルは、教育の大前提ではないかと考えますので、特別支援に限らず、アクセシブルは、より重点化して

いくべきことと考えます。

【地域ぐるみでの教育】

地域協働体制については、上記しましたが、補足しますと、教育だけに限らず、コロナ禍により世界中で「分断」や「格差」が顕在化しています。よりよい社会をつくっていく、より複雑化している社会課題を解決していくには co-creation など多様な価値観をもった人々が協働することがより重要と考えます。子どもを中心に、学校種の連携はもちろん、学校、家庭、民間教育機関、地域が一体となって子どもたちの学びを支援することが必要です。

報告書 P36、P37 の課題について、地域連携といっても一部の NPO や個人の方に頼らざるをえない状況、外部の方と学校をつなげるコーディネーターの人員不足や能力不足は全国的にでている課題で、この人材リソースが不足することで、探究的な学びが止まってしまうという状況もでています。今後、外部人材の供給を持続可能なものにするために、企業など民間セクターや市町村の役所などの公共セクターが組織としてかかわることが必要ではないかと考えます。また、学校の教育目標と外部人材の提供できるものとをすりあわせ、調整し、より子どもの学びに対して付加価値をあげるコーディネーターの養成は、個人の努力にまかせるだけでは限界がありますので、県や市町村がサポートする必要があるものと考えます。

【教育における ICT】

ICT の活用については、すでに今現在でも活用できないことがデメリットになる社会になっていますので、進める、進めないの議論ではなく、活用するのはアクセシブル同様、大前提と考えます。

コロナ禍で地域間の格差が相当顕在化している領域でもありますが、これからの社会を考えると、将来の予測が困難な中、精緻な計画をたててその通りに実行するという工業化社会のモデルは、通用する領域がどんどんなくなっていくものと考えます。ICT 活用だけに限ったことではないですが、小さいトライアルを重ね、改善していく、答えをつくっていくモデルを学ぶためにも、先生方の試行をサポートし、その改善を支援することがより必要になるものと考えます。先生方の最低限のスキル向上も必要ですが、ICT 領域は、より外部人材を受け入れ、学校と地域(専門性をもった人材)が連携する必要がある分野と考えます。

また、コロナでの休校措置期間の ICT の活用の状況を全国的に確認すると、公教育では残念ながらほとんど活用されていませんでしたが、比較的オンライン化した大学教育などの状況をみると、通常の授業をオンラインで配信するという形態が多い状況でした。対面でないアクティブ・ラーニングや協同的な学びはできないという思い込みがあったように感じますが、活用方法によっては対面よりもオンラインの方が協同的な学びにとって有効なこともあります。通常授業のトレースでは限界があり、授業の内容自体をオンラインの特徴にあわせて作り変える必要がありますが、多様な人と一緒に対話的に学ぶことができるオンラインでの学びについては、上記した通り試行→改善を繰り返すことが、試行錯誤を子どもたちが体験することにもなりますので、非常に有益なのではないかと考えます。

【その他】

コロナ禍により、学校現場、先生方は相当ご苦労が多いかと思えます。ただ、よりよ

い子どもたちの学びに変えていくきっかけにもなっているため、多くの先生方の取組が子ども達にとってより良いものとなっていると信じています。

新しいことを実行すると保護者の皆様から様々な意見がでてくると思いますが、保護者の方も、建設的な批判は必要ですが、サポートしていく姿勢が必要だと思います。そのためにも（保護者は何をやっているのか断片的にしか知らないと不安になるため）学校でやっていることの継続的な発信、浸透の取組と保護者との意見交換等対話がより必要であり、それが地域との連携につながっていくものと考えます。

C委員

【地域ぐるみでの教育】

地域に愛着と誇りを持ち、地域社会の役に立ちたいと思う人づくりを進めるため人は誰しも親に愛されたく・・・

親に褒められたり、信じてもらえる暮らしの中で、少しずつ自分に自信を持ち、自分を愛し、人や物を愛する心が芽生えるような気がします。そのためにも保護者がゆとりを持って子どもと接する時間が保たれるように、子育てしやすい地域づくりは重要と考えます。保護者がありがたいと言える学校・地域は、子どもの心に豊かに花を咲かせることでしょう。

安心して通える学校・ゆったりと過ごせる家庭・包容力のある地域となり、ありがたいが飛び交う島根となりましょう。

ひとは人にやさしくされないと、人にやさしくものではありません。

【教育におけるICT】

現代社会において多大なメリットがあるように思えますが、デメリットも多く生じるはずで、あくまでもツールであって機器使用が目的にならないよう十分な配慮が必要と思われまます。

D委員

【教育におけるICT】

学校内のICT活用のみにとどまるのではなく、どこにいても教育が受けられるように、オンラインやオンデマンド授業のための設備を整える必要があるのではないのでしょうか。

この環境は、特に特別支援に関して奏功すると思われまます。障がいのために外出・登校が困難な子ども達が学びやすくなります。

E委員

【地域ぐるみでの教育】

少子高齢化、核家族化、ひとりっ子が多くなっているなか、地域とのコンソーシアムが重要となっている。加えてシングル家庭も多くなっており、親の負担に加え精神的な孤独、孤立が与える子どもの影響は大きい。子どもの変化に気づく地域の力も大切だが、そういった保護者の声なき声に気づくことも大切と考える。子どもだけでなく保護者に向けての支援ができる体勢の取組ができれば良いと思う。

【教育におけるICT】

コロナ禍のなか、オンラインは重要となってくる。反面、人対人の関わりが少なくな

り、社会性を身につけることが希薄となるのではないかと心配になる。学習指導も重要だが、道徳や読み聞かせなど情報教育の強化を望む。

交流学习やインターンシップも中止となることが多く、同年代だけでなく多様な年代の人との関わりも少ない。様々な職種の企業からの情報（業務内容、理念、働く姿）などネット（DVD含む）を利用した子ども達に見てもらえることで、地域にある企業や、自身の目標につながるのではないだろうか。

F 委員

【重点的に取り組んでほしい分野】

少人数学級編制等、学校・学級規模にかかる施策について

「特徴的な動き②（7頁）」に関連して

「学校・学級という集団教育の中で、個々の児童・生徒の発達特性にも配慮しながら、今後の時代・社会に必要とされる、島根ならではの学力や人間関係力を育む」という視点から、県として推奨する学級規模（3～5パターン程度）を策定して各市町教委に示し、今後10年間、各市町がどのような「集団教育」のパターンを選ぶのか、共通の土俵の上で議論できるようにしてはどうか。

【地域ぐるみでの教育】

地域課題解決学習の推進

P36～39に示されている（1）～（4）の全体構想はたいへんよく考えられており、その成果を期待したい。同時に、次のような点に弱さがあるように思われるので、事業推進にあたって改善を図られたい。

・「保・幼→小・中・高」の教育的な積み上げが開花していく様子を「しまねの教育魅力化」の意義や成果として広く発信していく計画を！

地域の人々に可愛がられながら地域のことを体験的に知る時代から、地域の良さや課題を学習材料として知的に情報処理するとともに、多様な人々との対話の中で思考する段階、そしてそこから掴み取ったオリジナルな視点を国際的発進力も備えつつ表現する段階へ・・・そのような「教育的な積み上げ」が地域の人々にはもちろん、全国や世界に向けて積極的に発信され、島根の「教育魅力化」の意義と成果を示していただきたい。

【教育におけるICT】

総合教育審議会の一委員として、ビジョンに強く反映し損なったものがICTであり、今日のコロナ禍の状況が想定できなかったとはいえ、その視点の見識が不足していたことを強く後悔している。ICTについては、報告書にもビジョンにも「散見」されるし、県教育センターを中心に現場的なご努力をしておられることも理解しますが、やはりICT活用について、まとまった一つの柱が立っていないことは、今後5年間を考えると大きな問題である。

【「しまね教育ICTビジョン」の早急な策定】

総合教育審議会の下に分科会を置く形でも良いと思いますが、できるだけコンパクトな人数で「しまね教育魅力化ビジョン」を踏まえ、今後5年間で、教育の中でのICT活用をどう進めるかについて、方向性を示す必要があるのではないか。ともすると予算が先行し、機器の導入やWi-Fiの普及など、（必要ではあるが）場当たりの継ぎ接ぎの施策になりやすい。保・幼→小→中→高と段階を踏んで、
○どんな知識・技能をつけるか（何を知っているか、できるか）

- それを使って個としての認知能力（記憶、判断、思考、推測、表現など）をどう高めるか
- それを使って仲間や多様な人々と協働する力（通信、リモート、クラウド活用等）をどう高めるか
- それを自分と社会・世界の未来にどう生かそうとするか（学びに向かう力、人間性）といった議論の柱を立て、得られた方向性のもとに、機器や人材、研修等に関する予算を位置づけていくとよいのではないかと思った。

G委員

【重点的に取り組んでほしい分野】

新型コロナウイルス感染者を含めた人権教育

新型コロナウイルス感染拡大に伴う感染者への誹謗・中傷が社会問題として取り上げられている。国・県の関係機関からの通知等は出されているが、誹謗・中傷は後を絶たない。

少なくとも学校教育においては、HR、学級会活動、道徳などを活用し、更なるレベルの高い人権教育に取り組んでほしい。だれも感染者になりたくて、なっているわけではない。

【地域ぐるみでの教育】

① 「ふるさと島根を学びの原点に未来にはばたく心豊かな人づくり」を幼少時期から高校等を貫いた一体的・系統的な学校等教育を進めていくことは極めて重要だと考える。今年度は、高校魅力化コンソーシアムに力点が置かれているが、今後一体的・系統的な教育を推進していくためには、全体をマネジメントする人材（市町村）及びコーディネートする人材を少なくとも市町村の中学校区に配置し、一体的・系統的な教育を推進していく必要がある。

② 地域や社会の役に立ちたいと思う人づくりの推進は、地域ぐるみの幼児期から高校までの一体的・系統的な学校教育だけでは完結しない。むしろその後の大学生や専門学校生・就労者等の若者の意識や若者同士の連携や繋がりがとても重要であると考え。学校教育から社会教育への橋渡しと社会教育の役割が、地域や社会の役に立ちたい人づくりに重要だと思う。学校教育はよくやっていると思うし、人が多い。

学校教育で育てた力が、社会に出た若者の力として活かしきれていない感がある。社会教育にもっと人をつなぎ・育てる等の財政支援をする必要を感じる。

③ キャリア・パスポートの教育実践は、今後に期待する。是非とも長期的視野に立った人づくりを継続してほしい。

【教育におけるICT】

① 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、国や県がスピード感をもって取り組むようになった。ICT教育を推進していくためには、ICT教育支援員などの専門的な支援が大きく左右する。現在、各学校の教職員の大変な努力によってオンライン学習等が行われている現状である。国も支援をしているが、情報教育支援員人の配置が必要である。また、今後、新型コロナウイルス感染が収まっても、ICT教育への財政的・人材的支援を継続されることを提案します。

【その他】

教職員の働き方改革と教職員研修の充実

教職員の働き方改革に伴い業務を行う時間の上限、変形労働時間制の導入、年次有給休暇などの積極的取得を考えると、教職員の研修機会は、今までと同じようにならないと考える。特に長期休業中の研修は見直しが必要である。新型コロナウイルス感染症対策を機に、本当に必要不可欠な研修は何かを見直し、ICT機器を活用した研修など工夫し、研修の効率と質の向上を考慮し、働き方改革を推進してほしい。

H委員

【地域ぐるみでの教育】

「ふるさと教育」を「探究学習」「地域課題解決型学習」を中心に推進されようとしていることは全国的に誇ることができることだと思います。しかし、

- ① 教科との連関があまり考えられていないのではないかとこの危惧があります。
- ② また、高校発のアイディアで、小・中の学びが展開されているのではないかとこのことも気になります。
- ③ したがって、小・中学校の特性や児童・生徒の発達段階に応じた、実施計画を立てることが必要ではないかと考えます。
- ④ こうしたなか、現在、島根県が教員を研修として派遣している教職大学院の研究（小・中・高・特別支援学校の教員による研究）に有意義な実践が増えています。例えば、次のものは「ふるさと教育」（小学校）の良いモデルになると思います。
 - ・（令和元年度）赤川ホテルに関する「総合」の授業：小学生の発達段階を考慮したカリキュラムと実践
(参照：https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/list/shimane_creators/%E3%83%9E/87f5e2f7bc435462d97d82df718a374e/item/49486)
 - ・（令和2年度）高津川等の地域素材を用いた外国語活動：他教科や中・高とも連携
- ⑤ 地域や他機関連携のためのコーディネーター養成を推進することは必要だと思いますが、「基礎学力」の形成、児童・生徒の認知能力・非認知能力の発達段階への考慮、児童・生徒へのケア等、「教育」の側面を強く意識しておくことが非常に大事だと思います。ややもすると、「地域にとっての人材育成」のためのコーディネーターになってしまう危険があるように思います。

【教育におけるICT】

コロナ禍で大学ではICTを用いた学習が進んでいます。

大学生も、ICTによるプレゼン能力が向上しています。

大学生による支援等で、ICTを活用した学習の質向上が見込めるのではないのでしょうか。大学生もコロナ禍で実習の機会が制限されていますので、相互に協力し合えるものになるように思います。